

酒々井町

郷土研究会会報

第109号

平成15年7月1日  
酒々井町郷土研究会  
広報部

酒々井地域の遺跡(3)

小谷龍司

尾上藤木遺跡

本遺跡は一九八六年に発掘調査を行いました。現在国道二九六号線沿いの小野田レミコンの場所にあります。印旛沼に注ぐ小河川に切り開かれた舌状台地上に遺跡はありますが、遺跡の南側には高崎川と合流し佐倉方面の印旛沼へ注ぎ込む谷津があります。つまり水路を使って北方向にも西方向へも人・物の移動が可能な交通の要衝という立地になっています。

四度にわたる発掘調査の結果本遺跡は古墳時代後期から平安時代にわたる集落跡、縄文時代の土坑(竪穴)、弥生時代の住居跡などが発見されています。一部削平されて遺跡が消滅している地点がありました。がほ

台地全面に集落が展開していたと考えられます。またこの台地の南東、高崎川に注ぐ小河川に切り開かれた台地には尾上柳作遺跡という尾上藤木遺跡に隣接した遺跡があります。一九九四年にガソリンスタンド建設に伴う調査、二〇〇〇年に無線基地局建設に伴う調査を実施して尾上藤木遺跡の奈良平安時代における経営時期とほぼ重なる集落を検出しまし

た。この二つの集落が一つにまとまるのか集落の中心がなんらかの事情で移動していったのかは尾上柳作遺跡の調査面積が少ないこともあって一概にいえませんが交通の要衝にあって当時の人がどのような土地を利用していたかを考える上で興味深い事例だと思えます。また本遺跡の奈良時代末から平安時代にかけての住居跡から「佛」「依」「人依」と墨書された土師器杯が出土しています。「墨書土器」と呼ばれるもので、文字の普及の様子、当時の民間信仰などの民俗的な情報を取ることが出来ます。酒々井町域は古代より交通の要衝



東酒々井

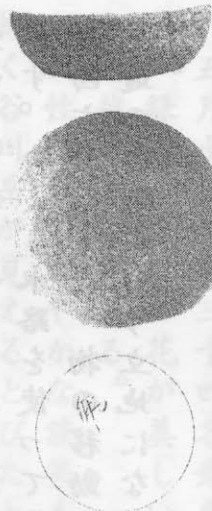
藤木遺跡

小盛田古墳

下台遺跡



尾上藤木遺跡C地区全景



墨書土器

であり、鹿嶋方面への「駅」の存在が予想される地でもあります。確定するのは難しいのですが、それを匂わせるような遺跡の密集状態を本遺跡を含めたこの地域は示しています。

### 野草観察会に参加して

新納久子

四月二十二日(火)午前九時に県立中央博物館に向けて、新車の町バスに参加者四十名を乗せて出発しました。館内では三班に分かれ、折目

る。小ナラとクヌギはドングリの形が違う。枝が高級つまようじに使われるクロモジ。独特のにおいのヒサカキなど説明して頂きました。いつまでも忘れないように・・・満開の八重桜の下で写真を撮り無事、帰路につきました。

先生の計らいで普段は入れない資料室へ、植物標本の作成過程の説明を受けました。標本は、一点ずつ採取地の新聞で包まれている植物を台紙に貼り付け、棚に分類整理されています。同館には約十五万点の標本が日光を避け防虫処理され保存されています。整理後の不要となった新聞の中には明治四十年代やケネディ大統領暗殺の新聞などゴミの古新聞が「お宝」になっています。

### 町内史跡巡りに参加して

江澤真一

今回の行程は上岩橋から伊藤方面である。

植物の生活や季節の移り変わりを観察できる野外博物館です。植物群落園では、房総半島の森林や草地、湿原、海岸などの姿を観察できるように再現しています。野鳥観察できる施設もあります。解説員の案内で園内を巡り、モミ・カヤ・ツガの区別は葉の先で見分け

午前九時、約七十名がJR酒々井駅から最初に向かったのは、日蓮宗常清山妙楽寺である。この寺の七面堂に祀られている七面大明神は、「麻疹の神様」として信仰を集めて

おり、毎月十九日は檀信徒が集まり  
 家内安全、除病延寿などを祈願する  
 御祈祷が行われている。次に向かつ  
 たのは、阿弥陀山長福寺である。真  
 言宗大仏頂寺の末寺で、平安時代に  
 像立された阿弥陀如来坐像は昭和六  
 十二年、県文化財の指定を受けてい  
 る。

山道を歩いて行くと森に囲まれた  
 駒形神社に着いた。駒形神社の建造  
 物は檜材の流れ造りの本殿、拝殿、  
 花崗岩製の明神鳥居があり、毎年四  
 月第一日曜日に町無形文化財の獅子  
 舞が奉納される。

伊篠松並木があつた道を歩いて向  
 かつたのは、仏樹山浄泉寺である。  
 この寺には県指定文化財の鑄銅雲版  
 の鳴器があり、応永二十二年(一四  
 一五)開山の周恩和尚が持参したも  
 のと伝えられている。本堂格天井の  
 絵は見事である。ここで昼食をとつ  
 た後松雲寺へ向かつた。浄泉寺の末  
 寺で無住、お堂には阿弥陀如来、薬  
 師三尊、十二神将が安置されていた。  
 最後に向かつたのは三人地藏だつ  
 た。建立月日は大正十五年四月で、  
 十歳、八歳、六歳位の哀れな三児の  
 ため村人たちの悲哀と温情によつて

建立され、彼等の霊を供養して現在  
 に至っている。

午後二時頃宗吾参道駅で解散、田  
 植えが終わつたばかりのたんぼのわ  
 き道をそれぞれ家路についた。

私は今回の史跡巡りのなかで特に  
 印象に残つたのは三人地藏の由来を  
 知つたことです。とても悲しい出来  
 事だつたようです。

五月十一日、天気にも恵まれた楽し  
 い一日でした。

日本道持国天、多爾天立像



(歴博)

はにわー形と心ー展

ボランティア体験記

浜口信義

国立歴史民俗博物館開設二十周年  
 記念企画展として三月十八日から六  
 月八日まで開催された。来館者に楽  
 しんでもらうため「体験コーナー」  
 として「触ってみよう、もってみよ

う、古代衣装ファッションショー」  
 が設けられ、このコーナーをわたし  
 たちボランティアが担当した。最も  
 注目され、喜ばれたのは「古代衣装  
 ファッションショー」であった。こ  
 の古代衣装は「芝山はにわ博物館」  
 からの借りもので、中国産の麻で作  
 られ、この衣装を作れる技術者はわ  
 ずかしかいないので、もし破損した  
 ら作り直すことが出来ない貴重品と  
 のことで、取り扱いには慎重になつた。

古代衣装着用希望者は子供から高  
 齢者まで圧倒的に女性が多かつた。  
 中庭に作られた舞台は古墳の拡大写  
 真を背景に、舞台上は各種のはにわ  
 が並んでおり、古代衣装を着た人達  
 は最高の笑顔でポーズをとり、友人  
 ・知人に写真撮ってもらつていた。

また小学校からの見学者も多く、一  
 校四名の古代衣装を着た児童が級友  
 に囲まれ、先生に写真を撮ってもら  
 っていた。古代の衣装は着た本人と  
 回りの人々に何か見えないものを与  
 えていたようだった。このように多  
 くの人達に接し緊張のある一日を過  
 ごし貴重な体験をしたボランティア  
 であつた。

一泊見学会  
新津・弥彦・出雲崎方面

高橋 稔

五月十三日、三十四名乗車のバスは、緑濃くふじの花が美しい爽やかな関越道をひた走る。

女性会員の賑やかな談笑も、残雪抱く谷川岳が見えるとぴたと止み、みな視線が一斉に。

六日町で越後三山の一つ八海山を眺望しながらの昼食。広漠たる越後平野を車は順調に北方文化博物館へ向かう。

「豪農の館」の名のとおり、すべての面で桁違いのスケールに驚嘆するばかり。色々の研究問題が求められそうだ。

泊りは弥彦温泉「みのや」。風呂よし、酒よし、料理よしで好評だった。なごやかな会食。

翌五月十四日朝、越後一宮弥彦神社参拝。万葉の昔から崇敬されているだけに荘厳な社だ。

次に佐渡は見えねど波静かな日本海に沿って出雲崎へ進む。

清楚な良寛記念館で、良寛の人柄

を示すといわれる書・遺墨をはじめ多くの展示品に心うたれ逸格の名僧の面影を偲ぶ。  
次いで生誕地に建てられたという良寛堂と、俳聖が大宇宙を觀して「荒海や」と吟じた地の芭蕉園を訪れ見学を終了した。  
寺泊港で魚尽しの昼食後帰途へ。もう関越トンネル越えたか」とばかり帰路は早かった。  
二日間とも天候と美しい自然に恵まれ、九九〇キロの行程を順調、無事に走破した。心豊かな楽しい一泊見学会であった。



郷土研日誌

月日	内容	人数
3/25	印刷	5
29	発送	21
4/25	古文書学習	14
22	野草観察会	39
23	道標調査	14
5/10	史談会	15
11	町内史跡巡り	70
13	一泊見学会	34
19	街道下見	3
20	古文書学習	11
23	道標調査	10
6/ 3	名勝下見	4
4	会報編集	6
6	名勝探訪	32
7	運営委員会	21
7	史談会	17
14	会報編集	4
17	古文書学習	11
20	道標調査	9
21	会報編集	4

会計報告

～野草観察会4/22～	
収入	1,000×39=39,000円
支出	昼食代・駐車料金・雑費 39,154円
不足	154円 (郷土研より補充)
～新潟・弥彦方面(5/13～14)～	
収入	24,500×34=833,000円
支出	八街観光(株) 829,541円
	諸雑貨 18,502円
	848,043円
不足	15,043円 (郷土研より補充)

新潟・弥彦方面旅行に寄せて  
丸山 緑醉(正義)  
磨きあく旧家の縁や新樹光  
新緑に朱塗りの映えし大鳥居  
良寛像視線の先に皁月波

# 見学

## 案内



### 郷土史講座案内

八月十七日(日) 一時三十分

### 『水陸交通からみた本佐倉城』

四街道高校 遠山成一

下総千葉氏が佐倉の地(現酒々井町本佐倉)へ本拠を構えた文明年間(古河公方足利成氏と関東管領上杉氏との享徳の乱が続いており、下総千葉氏は古河公方側に一貫してついていた。佐倉の地は印旛浦、香取海を通じて古河に水運で連絡できることが大きな意味を持っていた。

また、陸上交通では、船橋から臼井、本佐倉を経て東総方面へ通ずる街道、千葉から現四街道市内、本佐倉を経て成田、香取方面へ通ずる街道、さらに上総方面に南下する街道などがあり、現代にいたるまで本佐倉城のある酒々井町は一貫して要衝を占める。そして戦国後期になると、下総侵

攻を図る里見・正木氏の房州勢に對し、鹿島川を利用した防衛線て対処した。このような水陸交通の要衝を占める本佐倉城は、戦国後期にいたるまで、下総において一定の地位を占め、戦国末期には後北条氏も直重を養子に入れることによって、佐倉の支城化を図っている。戦国時代の、本佐倉城の交通体系上からみた位置づけを考えてみたい。

### 名勝探訪

九月十日(水)

雨天代替九月十二日(金)

### 佐倉七福神巡り

残暑の中、ロマンと福の神を求めて、江戸時代の城下町、佐倉七福神巡りを致します。

七福神の信仰は古く室町時代以降からあり、一般化したのは江戸時代で、とくに江戸時代後半には盛んになったようです。

佛教の七難即滅、七福即生の思想を受け、七福神をお参りすると七つの災難が除かれ、七つの幸福が授かるといわれています。

ゆっくりとした行程ですの、散歩

を兼ねながらお出かけ下さい。集合場所は京成佐倉駅三井住友銀行前になっています。気をつけて下さい。

### 〔お知らせ〕

九月の実施をめざして銚子街道を歩く準備をしてみました。この街道はトラックなどの大型車両の交通量が多く危険なので、残念ながら取りやめとし、改めて別の街道を検討してご案内したいと思います。

### あとがき

最近、郷土研究会の道標調査をして気付いたことは、富里市新橋方面から上岩橋にかけて『至停車場』という道標がいくつもあったことだ。車のない時代、国鉄酒々井駅まで徒歩で行き汽車に乗って千葉や東京に行くのが唯一の交通手段であったことを伺うことが出来る。このほか上岩橋の三叉路に『至渡船場』という

昭和初期(約七十五年前)と今との交通面で時代の大きな差を感じる。

# 郷土研行事案内 平成15年7月～9月

<p>史談会</p>	<p>7月 5日(土) 13:30 会議室 「古今佐倉真佐子」 ⑤ 講師：高橋健一先生</p>	<p>8月 休講</p>	<p>9月 6日(土) 13:30 会議室 「古今佐倉真佐子」 ⑥ 講師：高橋健一先生</p>
<p>古文書を 読む会</p>	<p>7月 15日(火) 13:30 社会福祉協議会 『島田家文書』 ④</p>	<p>8月 休講</p>	<p>9月 16日(火) 13:30 社会福祉協議会 『島田家文書』 ⑤</p>
<p>郷土史 講座</p>	<p>8月17日(日) 13:30 会場：中央公民館講堂 演題：『水陸交通からみた本佐倉城』 講師：千葉県立四街道高校 遠山成一先生 後援：酒々井町教育委員会 13:00開場 入場無料 御来場お待ちしております。 おります。</p>		
<p>名勝探訪</p>	<p>行程 9月10日(水)「佐倉七福神巡り」 雨天代替9月12日(金) 集合 京成佐倉駅 8:30 京成佐倉駅—大聖院—麻賀多神社—妙隆寺—松林寺 —宗円寺—甚大寺—嶺南寺—歴史生活資料館 解散14:00予定 (行程一部変更あり) 弁当・飲み物持参</p>		